通訳者の役割モデルの研究 -6つのスタイルと2つの機能-

溝口 良子

(南山大学大学院)

This article explores the scope of the interpreter's role as perceived by interpreters and other participants in interpreter-mediated communication. Traditionally, viewed as "a mere machine or conduit", interpreters have been expected to translate word for word. However, new studies are revealing that in practice, some translators are trying to narrow cultural and linguistic gaps between monolingual speakers to facilitate smoother communication.

Factors defining the roles of interpreters vary greatly, depending on the field, occasion and mode of interpretation in which they are set to work. In this study, interview data were analyzed by means of the ALSCAL (Alternating Lease Squares Multidimensional Scaling) method, and the results suggest there are six styles and two functions in the roles of interpreters. These results will help interpreters have more flexible views on their roles and shift their roles more flexibly according to the setting.

1. 問題と研究の目的

背景とする文化が異なる人たちの間に立って、そのメッセージを伝えコミュニケーションの仲介をするのが通訳者の仕事であるが、日本では「通訳者は本来、黒子であり、自分の意見や解釈を差し挟むことがあってはならないと考えられている」(稲生・染谷,2005, p. 80)。鳥飼(2007)も、「日本では、通訳者は『黒衣』と呼ばれる」としている。すなわち、通訳者には「言葉を忠実に訳す目に見えない存在」という役割が期待されてきた。また、ゴフマン(Goffman,1959)に代表される「non-person—人間であって人間ではない存在」という通訳観や、それに近いモデルとしてレディ(Reddy,1979)の「導管モデル(Conduit metaphor)」などもある。

通訳者の役割については、1970 年代半ばに研究・論争が始まった。これまでの研究では、「黒子」か「参与者」か、という二極で論じられることが多く(吉田, 2007)、いまだその論争には結論が出ていない。それ以外には、「通訳者は異文化ファシリテーターである」(辻, 2006)や

MIZOGUCHI Ryoko, "Study on the Interpreter's Role –Six Styles and Two Functions," *Interpreting and Translation Studies*, No.9, 2009. pages 71-86. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

「通訳者は文化の仲介者である」(鳥飼、2007)などもある。現在のところ、通訳者の役割を全体 として構造分析したものは見当たらず、したがって通訳現場で実際にどのような役割が果たさ れているのかに関する全体像も明らかになっていない。そのことにより、それぞれの通訳者が 個別の通訳観をもち、時にはその通訳観が固定化してしまうことがある。現場ではひとつの通 訳観が常に有効であるとは限らず、場面に応じて柔軟に対応する必要があるにもかかわらず、 固定化した通訳観のせいで役割や訳し方を変えることができないことからくる問題も発生して いる。たとえば、筆者が実施したインタビューにおいてある通訳者は、「本来は場を盛り上げる のも通訳者の役割のはずだけど、駆け出しのころに黒子という役割に固執しすぎて、スピーカ ーと同じく暗いトーンで訳してしまい、あとでクレームがついたことがある」という体験を語ってい る。また、インタビューに答えたクライアントの一人は、通訳者の仕事に満足しなかった例として、 「時間が押しているのに、正確にすべてを訳していた。そういう時は、要点をまとめて時間通り に終らせてほしかった」と述べている。つまり、全体的な通訳者の役割が明確に示されていな いため、個人の通訳観に頼らざるを得なくて、柔軟性がなくなり、場のニーズやクライアントなど の要望に応える適切な役割や訳し方ができないケースが起きている。加えて、クライアントやス ピーカーなどにも、通訳者の役割や訳すとはどういうことかということに関する理解が不足して いることが多い。そのため、事前の打ち合わせや資料が必要ということが理解されず、通訳業 務関係者と通訳者がそれぞれに異なった通訳観をもち、すり合わせをしないままに仕事に入 ることも多い。その場合は、双方の文化の違いを埋めて相手にわかりやすく伝えるという負担 が、通訳者だけの肩にかかることになり、通訳者の負担が増加する。加えて、このような状況で は通訳者がクライアントやスピーカーなど関係者からの通訳者に対する期待を把握することが できず、その結果として通訳者の努力にもかかわらず、クライアントなどの満足に繋がらない場 合もある。

そこで、本研究では、通訳の現場でどのような役割が求められ、また通訳者たちは実際にどういう役割を果たしていると考えているのかを関係者へのインタビューによって探り、その中から「通訳者の役割」に関連する要素を可能な限り抽出し、分類することで「役割モデル」の全体的な構造を明らかにしたい。それにより、通訳者が自らの役割に関する柔軟な意識をもち、現場のニーズに合わせた役割のシフトが可能になることが期待される。

以下、第2節で研究方法について述べ、第3節で結果と解釈について記述し、第4節では、 先行研究の記述と照合しながらクラスターの妥当性を検討し、第5節で全体的考察を行なう。

2. 方法

インタビュー調査によって、通訳者の役割に関する質的データを網羅的に収集して、その結果を分類し、さらにデータの全体構造を明らかにするために多次元尺度法による分析を行った。

まず、予備調査 (2006年10月 -11月に実施)として、通訳者4名、クライアント3名に半構造化インタビュー $^{1)}$ を行った。なお質問 $^{2)}$ にあたっては、個人の現場における通訳に関わる様々な視点から具体的な体験を語ってもらうように留意した。つまり、定めたとおりの質問をするの

ではなく、話し手との自然な流れを乱さないように協力者の発言の流れに合わせてインタビューを行なった。これにより得られた通訳者の役割に関する項目(148項目)に、筆者の通訳経験から考えられる役割項目(36項目)を加え、184項目をリストアップした。それらをもとにして内容的に非常に類似していると見られる項目などを取り除き、「通訳場面における通訳者の役割」に関する94項目を抽出した(附表1)。

次に、協力者17人(通訳者4名・通訳ガイド2名・翻訳者2名・ボランティア通訳者5名・英語教師1名・通訳者を雇用する機会のあるクライアント2名(外資系IT関連会社の講演会・会議担当者とNPOのセミナー担当者)・通訳エージェント1名)に、山分け法により2回分類することを求め、得られた分類データを次のように数値変換した。山分け法とは、1枚のカードに1項目ずつを記述し、類似している項目を集めていくつかのカテゴリーに分類する方法である。なお今回の山分け法を実施するにあたっては、幅広い視野からデータを収集するために、通訳教育を英語教育という視点からもとらえるべく、また翻訳の視点もとりいれて、通訳関係者だけでなく英語教師や翻訳者も含めて上記の人々の協力を得た。

第1回目の分類において、同一カテゴリーに入れられた項目間には項目間類似度として1点を、そうでないものには0点を与えて、0-1の94×94の類似度マトリックスを作成した。同様に、第2回の分類結果も0-1の94×94の類似度マトリックスを作成した。そして、第1回目と第2回目の類似度マトリックスのセルごとの和を求め、協力者ごとに0-1-2の類似度マトリックスを算出した。データ分析のために、0-1-2の類似度を 3-2-1の距離データに変換した。すなわち、第1回目、第2回目ともに同一カテゴリーに分類された項目間は距離度1点、どちらかの判断でのみ同一カテゴリーに分類された項目間は距離度2点、2回とも同一カテゴリーに分類されなかった項目間は距離度3点となり、結果的には協力者ごとに3段階による距離度マトリックスとして変換された。

3. 結果と解釈

94×94の類似度マトリックスのセルごとに距離度点数を単純加算し、94×94の距離度総和マトリックスを算出した。次に、距離度総和マトリックスを入力データとして統計パッケージSPSS (Statistical Package for Social Science 14.0J for Windows)の多次元尺度法のALSCAL(Alternating Least Squares Multidimensional Scaling)を用いて2次元解を求めた。この方法は、対象間の距離の実測値と空間布置間のズレが最小になるように指定した次元における空間布置を求める方法であり、質的なものを量的に分析する手法である。ALSCALではKruskal のストレス値と説明率の指標として相関の2乗(RSQ)が出力される。ストレス値とはモデルの適合度を表し、0に近いほど適合度の良さを示している。RSQ値とは、座標化された空間に対して、データの当てはまり度を示す値であり、1を上限とし、1に近いほど適合度の良さを示している(林・飽戸, 1976)。

結果はStress = .2537 RSQ=.7119 であった。充分な値を得ることはできなかったが、通訳者の役割の構造を探索的に捉える研究としては有効であるとして分析を進めた。図1 (p 5)はその結果を用いて94項目の役割を2次元空間に布置したものである。

3.1 次元の解釈

第 I 次元(図 1 横軸)

第 I 次元では、正の方向にウエイトの高い項目として「そのまま訳しても聴衆に通じないと思うときは、文化差を補足説明する」「セクハラに近い発言は、適当な表現に直して訳す」「話者の話が分かりにくい場合は、話者に言い直してもらうように頼んでから訳す」などがあり、負の方向には「情報が不足して分かりにくくてもそのまま訳す」「一語一句を正確に訳す」「話者の感情的な表現(怒り、ののしりなど)もそのまま訳す」などがある。この次元は話者の話を聴衆にわかりやすいように文化差の説明などを加えて訳す訳し方と、話者の話に何も付け加えずそのまま訳す訳し方とを示しており、分かりやすく直して訳す(意訳)ーそのまま訳す(直訳)《訳し方》の次元として解釈した。

第Ⅱ次元(図1 縦軸)

第Ⅱ次元では、正の方向にウエイトの高い項目は「聴衆に通訳の存在を意識させないように訳す」「話者の陰で目立たないように訳す」などがあり、負の方向には、「全体の進行に配慮し、気づきがあれば、主催者などに伝える」「場の雰囲気を盛り上げるように訳す」「英語と日本語のロジックの違いを察して、聴衆の文化でのロジックに合わせてわかりやすく訳す」などがある。この次元は話者の陰に隠れて訳すことだけに徹する場合と、訳す以外の役割も担う場合とを示しており、「黒子」に徹する(受動的)ー訳す以外にも役割を担う(能動的)《関わり方》の次元として解釈した。

これら「訳し方」と「関わり方」を、通訳者の 2 つの機能と解釈した。ここでは、「機能」は通訳者の役割を構成しているはたらきを指す。

3.2 クラスターの解釈

次に 94×94 の類似度マトリックスを入力データとして階層的クラスター分析を行った。階層的クラスター分析とは、対象間の距離の近いものを順次 1 つのクラスターに取り込み、いくつかの分類カテゴリーを算出する方法である。その算出結果を ALSCAL による 2 次元解の空間布置の上に描いてみた。(図 1)

図1には6つの比較的大きなクラスター(ABCDEF)が記されている。また、クラスターとしてまとまらない3項目が第3象限にある。

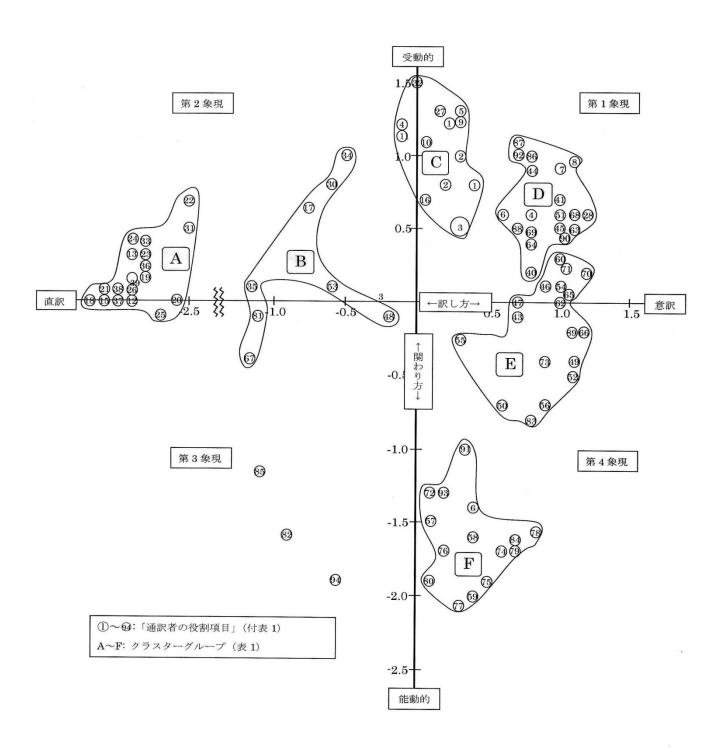


図1 役割の項目の2次元空間配置とクラスター

クラスターA はく言葉を訳す>のクラスターとして解釈した。このクラスターは、「冗談を訳す時は、文化の差で通じないと思ってもそのまま訳す」(図中 18)「日本人の謙遜表現などを英語に訳しても意味が通じないと感じても、そのまま訳す」(15)「話者が何かをほのめかしているとわかっていても、言葉に現れていることだけを伝える」(37)「話者の感情的な表現(怒り、ののしりなど)もそのまま訳す」(12)「セクハラに近い発言もそのまま訳す」(39)「話者が話し下手でもそのとおりに訳す」(13)「話者の感情表出のノンバーバルなものは含めず、言葉だけを訳す」(23)「情報が不足して分かりにくくてもそのまま訳す」(24)「英語と日本語のロジックの違いは仲介せずにそのまま訳す」(33)「一語一句を正確に訳す」(22)など 18 項目からなり、第 I 次元の負(直訳)の方向に位置しており、第 I 次元では主に正(受動的)の方向に位置している。

クラスターB はく省略して訳す>のクラスターとして解釈した。このクラスターは、「知らない単語や表現が出たときは、その部分を飛ばして訳す」(67)「対立しているグループの間に立って通訳をする時は、感情的部分は省いて必要な情報だけを双方に伝える」(81)「日本人の謙遜表現などを英語に訳しても意味が通じないと感じたら、カットして訳す」(53)「感情的な表現(怒り、ののしりなど)は中立的に訳す」(48)など 8 項目からなり、第 I 次元の負(直訳)の方向に位置し、A よりも中心に近い位置にある。また、第 II 次元では主に正(受動的)の方向に位置している。

クラスターC はく見えない存在>のクラスターとして解釈した。このクラスターは、「話者と聴衆が直接話したような感じになれるように訳す」(29)「話者と同じテンションで一体になって訳す」(11)「話者の陰で目立たないように訳す」(4)「話者の話の流れを壊さないように、タイミングよく訳す」(27)「話者より長くかからないように訳す」(14)「聴衆に通訳の存在を意識させないように訳す」(5)など 13 項目からなり、このクラスターC は第 Π 次元の「受動的」の極を代表していると考えられる。第 Γ 次元では主に正(意訳)の方向に位置している。

クラスターD はく予測・推測をして訳す>のクラスターとして解釈した。このクラスターは、「一語一句よりも話者の意図を把握して、それを伝えるように訳

す」(61)「話者の考え方やロジックを理解し、話者の意図を把握して訳す」(42)「話の展開を予想しながら訳す」(40)「事前準備で調査・収集した背景知識を駆使して、話者の言いたいことを把握して訳す」(41)「知らない単語や表現が出たときは、前後の文脈から判断し、整合性があるように訳す」(68)など 19 項目からなり、第 I 次元の正(意訳)の方向に位置しており、第 I 次元の正(受動的)の方向に位置している。

クラスターE はく文化も訳す>のクラスターとして解釈した。このクラスターは、「情報が不足してわかりにくいと思ったら、情報を足して訳す」(66)「話者より長くなっても、説明を加えてわかりやすいように訳す」(52)「そのまま訳しても聴衆に通じないと思うときは、文化差を補足説明する」(65)「英語と日本語のロジックの違いを察して、聴衆の文化でのロジックに合わせて分かりやすく訳す」(71)「日本人の謙遜表現などは英語に訳しても意味が通じないと感じたら、英語として自然な表現に直して訳す」(54)「カラオケの歌詞や諺など日本独特な心情を表す言葉を訳す時は、文化の差を埋めてわかりやすく訳す」(60)「冗談を訳すときは文化の差を考え

て、なんとか笑いが起こるように工夫して訳す」(55)など 18 項目からなり、第 I 次元の正(意訳) の方向に位置して第 II 次元では主に負(能動的)の方向に位置している。

クラスターF はく見える存在 > のクラスターとして解釈した。このクラスターは、「全体の進行に配慮し、気づきがあれば主催者などに伝える」(75)「会議などでは、主催者のもち時間や流れ(スケジュール)を頭に入れて訳す」(74)「講演などで、重要な情報を話者が出していない場合は、話者本人に伝えて話してもらう」(78)「時間がないときは、その旨を話者に告げて短く話してもらう」(58)「場の雰囲気を盛り上げるように訳す」(6)「対立しているグループの間に立って通訳をする時は、仲介するような訳し方をする」(93)「感情的な表現(怒り、ののしりなど)は『そのまま訳してもいいですか』と話者に確認してから訳す」(91)など 15 項目からなり、第II次元の負(能動的)の方向に位置しており、第II次元の正(意訳)の方向に位置している。

その他の3項目は解釈が不能であった。

以上をまとめると表 1 のようになる。

| 機能 | 訳し方(第Ⅰ次元) | 関わり方(第Ⅱ次元) |
|---------------|-----------|------------|
| スタイル | | |
| 言葉を訳す(A) | もっとも直訳的 | 主に受動的 |
| 省略して訳す(B) | 直訳的 | 主に受動的 |
| 見えない存在(C) | 主に意訳的 | もっとも受動的 |
| 予測・推測をして訳す(D) | 意訳的 | 受動的 |
| 文化も訳す(E) | 意訳的 | 主に能動的 |
| 見える存在(F) | 意訳的 | もっとも能動的 |

表 1 スタイルと機能

3.3 クラスター間の関係

「訳し方」の軸でみると A がもっとも直訳的であり、E と F が意訳のレベルが高く対照的な布置となっている。直訳の方向の布置となっているものは A と B であり、意訳の方向の布置となっているものは C,D,E,F であった。項目数では、C 項目が直訳の方向にあり、C 項目が意訳の方向の布置となっていた。結果として、本調査で用いた C 項目においては意訳的な訳し方が多いという結果を示していた。

「関わり方」の軸でみると C がもっとも受動的であり、F がもっとも能動的で対照的な布置となっている。E の多くの項目は能動的であり、AB の多くの項目と CD は受動的な方向の布置となっていた。項目数では、57 項目が受動的な方向にあり、28 項目が能動的、中間的な布置となっているものが 7 項目であった。結果として、本調査で用いた 94 項目においては受動的な関わり方が多いという結果を示していた。

全体としてみると、以下のようにまとめることができる。

- ・通訳者の役割には「訳し方」という機能と「関わり方」という機能があることが示された。
- ・純粋な「黒子」を示す、直訳で受動的な第 2 象限左上に位置するクラスターは見られなかった。

- ・第1象限にはCとDがあり、意訳的で受動的な通訳者の働きのクラスターが見出された。
- ・第2象限には、直訳的で受動的なAとBのクラスターが見出された。
- ・第3象限において、明確に直訳的で能動的であるといったクラスターを見出すことはできなかった。
- ・第4象限には意訳的で能動的なEとFのクラスターを見出すことができた。
- ・本調査で用いた 94 項目においては、直訳的であれば受動的な関わり方となるが、意訳的な場合は、能動的な関わり方と受動的な関わり方に分かれることが示された。言い換えれば、受動的な関わり方であっても訳し方は直訳的な訳し方(第2象限)と意訳的な訳し方(第1象限)の2種類があり、能動的な関わり方であれば意訳的な訳し方(第4象限)になることが示されたことになり、これまでの「黒子」と「参与者」では収まらないスタイルが存在するといえよう。一般的に述べられてきた「黒子」は、第2象限の直訳的・受動的なクラスターを指すものと考えてよいだろう。より積極的なクラスターとして、第4象限の意訳的・能動的な存在がある。これは、近年の通訳者の役割に関する研究の中で「黒子」に対する「参与者」と述べられてきた通訳者の存在にあたるといえるだろう。

次に、第1象限の意訳的でしかも受動的なクラスターCとDについて考察する。

3.4 クラスターC と D について

もし「黒子」を「直訳的かつ受動的」な役割と定義すれば「黒子」は $A \ge B$ だけとなり、第1象限にある $C \ge D$ は「意訳的」という訳し方であり「黒子」に反するもので、「黒子」とは呼べない。しかし「黒子」の定義を「直訳的または受動的」な役割とすれば、第1象限の「受動的」という関わり方は「黒子」にふさわしいものであるため、 $C \ge D$ は「黒子」と呼べることになる。

Cは「見えない存在」であり、もっとも受動的なクラスターであることを考慮すると、「黒子」とみなすのが自然ではないかと考えられる。項目中には「話者の影で目立たないように訳す」や「話者と聴衆が直接話したような感じになれるように訳す」があり、「黒子」のあり方に近いといっていいであろう。意訳の方向に位置しているのは「話者より長くかからないように訳す」「話者の話の流れを壊さないように、タイミングよく訳す」があるなど、単なる直訳だけでなく話者に対する配慮を行なう行為が含まれているため、意訳の方向に位置していると考えられる。このような点からも、Cは「黒子」とみなしてよいと考えられる。

Dは「予測・推測して訳す」役割であり、上記で見たように「黒子」として分類するかどうかが、あやふやなクラスターである。受動的な関わりの中では最も意訳的であり、もっとも「参与者」に近いと考えられる。Dの中の項目である「一語一句よりも話者の意図を把握して、それを伝えるようにする」などは、限りなく E(文化も訳す)に近いと言える。また、「予測・推測する」のは異文化知識や背景知識を動員してメッセージの内容を把握するということであり、その点でも E に近いと言えるであろう。このため「意訳」の方向に位置していると考えられる。しかし、通訳者が元話者の意図や自身の異文化知識をその訳文に「反映」させるとしても、説明を「補足」するまでには能動的ではないことになる。受動的で意訳的という位置を考慮すると、D は線引きが難しいクラスターとなるようである。極端に「黒子」でもなく、はっきりとした「参与者」でもないあり方

といえよう。

また、たとえ直訳をする場合でも、知らない単語や聞き取れなかった部分は前後で予測・推測している可能性がある。どのスタイルの役割においても共通して行なっていることと解釈できるだろう。

通訳者の役割全体としては、「意訳的」で「受動的」な役割が多いという結果が出ていることから判断すると、この分類しにくい第 1 象限の $C \ge D$ というあり方が平均的な通訳者の基本姿勢であり、 $A \ge B$ という「黒子」に徹するあり方と $E \ge F$ という「参与者」的役割が、極端なあり方と言えるのではないだろうか。

「参与者」としての役割 E と F を 果たす時にも、基本的には「黒子」として背後に控えるべきであるという意識は通訳者に共通していると思われる。また、たとえ通訳ブースで同時通訳をして A と B の役割をしていても、異文化知識などを用いて予測・推測しなければ適切な訳出はできないはずである。 C と D を 共通する 基本 姿勢とみることは可能ではないだろうか。

4 クラスターの妥当性の検討

今回の通訳業務関係者数名に対するインタビューの分析により少なくとも 6 つのスタイルが 抽出できた(表 1)。通訳者たちは現場のニーズに応じて、様々な役割を果していることになる。 この結果を通訳に関する先行研究に見られる記述と照合し、クラスターの妥当性を検討した。

A(言葉を訳す)のクラスターに対応する役割として、水野 (2005)は、米国の NAJIT (National Register of Public Judiciary Interpreters and Translators)やオーストラリアの AUSIT (Australian Institute of Interpreters and Translators)等の海外の通訳翻訳関連組織による法廷、医療、コミュニティー通訳に関する各種倫理規定を比較する中で、法廷通訳人を対象とした正確性の項目を研究し「元の発言をそのままの形で訳すことが求められている」と述べている。また辻 (2006)は英国の公共サービス通訳者の全国的登録制度である NRPSI(National Register of Public Service Interpreters)の通訳者の指針について研究し、その中の「通訳者は発言を忠実に訳すことが原則であり」という記述を紹介している。ほかにも、福井・浅野(1961)は、「発言者が誤った発言をした場合でも原則としてはそのまま訳すべきです」と主張している。鳥飼 (2007)は「国際会議における同時通訳が中心を占めていた頃は、通訳者の役割は『中立』かつ『透明な存在』とされ、黒衣に徹し、独自の解釈や編集を加えた訳を試みることは厳しく戒められてきた」と紹介している。また、稲生 (2003)は CNN の二ヶ国語放送草創期における通訳者の役割について、松原 (1999)は法廷通訳人の役割について、A に近い言及をしている。以上のように、海外における通訳者用倫理規定、同時通訳、草創期の放送通訳や法廷通訳人に関する記述の中に A の役割に該当する記述が多く見られた。

次に B(省略して訳す)のクラスターに対応する役割として、稲生 (2003)は CNN の二ヶ国 語放送発展期における通訳者の役割について、「同時通訳者には(中略)、瞬時かつ簡潔に 要点をまとめる資質が必要」と述べている。また光藤 (2002)のある俳優のテレビインタビュー 通訳への意見、「通訳が手短に要領よく説明してくれるだけで十分だったのである」や、小林 (1996)の「同時通訳のときは、時間的制約が大いに問題となります。スピーカーが意識をして、

ゆっくり話してくれたとしても、100%訳すことは、まず無理です。85%プラスマイナス 10%ではないでしょうか」などが見られた。瀧本 (2006)は、ある通訳者の体験を紹介し「全体を訳していくよりも、ポイントをつかんで訳す方がむしろ重宝がられる」と記述している。ほかにも時間への配慮をする場合に行われる、という記述が多かった。

C(見えない存在)のクラスターに対応する役割には、「通訳者は空気のようであるべきであって、見えなくてしかも無くてはならない空気のようであるべきだ」松原 (1999)や、鳥飼 (2007) の「通訳者も(歌舞伎の黒衣と)似たような存在である。主たる発言者と同じ立場に立ち、対話の橋渡しという役割を果たしながら、見えない存在、透明人間として扱われる」など、通訳者の役割への伝統的または基本的な期待に関する記述中に、C に該当する表現が多く見られた。

D(予測・推測をして訳す)のクラスターに対応する役割に関して、稲生・染谷 (2005)は「通訳においても、たとえばある単語が聞き取れない場合、前後の文脈からそのおよその意味を推測し、その意味を包括する上位概念や隣接する類似語で置き換えたり、一連の命題を一つに統合して訳出するといった工夫はごく普通に見られることであり、こうした方略的能力は通訳者に不可欠なスキルとして積極的に評価されるべきものと考えられる」と述べている。また辻・辻 (1994)の「日本のビジネスの"現場"では阿吽の呼吸、以心伝心的コミュニケーションが取られている。(中略)このような"言外の要素"を十分に読み取れない場合、スピーカーの言わんとしていることが的確に伝わらないことになる」も D に該当する例と言えよう。加えてピンカートン・篠田 (2005)は、「国際共通語としての英語は、様々なお国ぶりを反映するので、しばしば聞き取りに苦労する」と予想や推測の必要な例を紹介している。通訳業務の全般において行われている役割であり、日本語を外国語に訳す際にも重要な要素であるようだ。

E(文化も訳す)のクラスターに関して、鳥飼 (1994)は、「訳すという行為を言語という次元のみで議論するのは間違いであり、その本質は、異なった文化の橋渡し、異文化を超えてメッセージを伝えることである」と述べており、辻(2006)は、「外国人役員が日本企業の経営で遭遇するコミュニケーション上の障害を取り除く対策として、通訳者はコミュニケーション・ファシリテーター (communication facilitator)のような役割を期待されることがある」としている。その役割を果たすためには、文化のギャップを埋めることも必要だろう。稲生・染谷は「実際には共通するコンテクストをもたない聞き手の理解を促進するために、最小限の『情報の補足』あるいは『編集』をせざるを得ないことがよくある」と記述している。 E は伝統的に期待されてきた「黒子」とは対照的な「訳し方」であり、近年の研究や通訳者の著書などに多く見られる役割と言える。

F(見える存在)のクラスターに対応する役割の記述としては、小林 (1996)は自らの経験から、「黒子といっても、いつも受身でいてはいけないわけです。その場を取り仕切る、切り盛りする、発言の交通整理をするといったことも通訳の仕事となります。必要に応じて、アクティブに行動する黒子というわけです」と述べ、篠田・新崎 (1995)は、「聞き手の表情をよく見る。ふんふんと頷いていたら次にいく。みんなが首をかしげていたら、話し手に聞きなおすか、もう少し説明してあげた方がいいと助言する」と述べている。Fは、伝統的に期待されてきた「黒子」とは対照的な「関わり方」と言えよう。この役割も、近年の研究や通訳者の著書などの記述に多く

見られる。

以上のように、A-F の役割に対応する記述がすべて文献中に見られた。しかし、一人の著者が複数の役割について言及した研究や文献は多数見られたが、A-F の役割すべてについて記述したものはなかった。また辻 (2006)の「クライアントの視点に立った対応」やピンカートン (1996)の「通訳者の料金を払う側に通訳者は忠実でなければならない」、あるいは光藤 (2002)の「人間のトータルなコミュニケーションを扱っていると言う認識が、これからの通訳には必要であろう」など A-F の役割以外の記述も数件見られた。

5 考察

従来、通訳者の役割をめぐる議論は、通訳現場における通訳者の「機能」を分けることなく行なわれてきたが、通訳者の役割には「訳し方」と「関わり方」という 2 つの機能があることが見出された。前者は通訳者の「言語的」機能であり、後者は「社会的」機能である。アンジェレーリ (Angelelli, 2004)は、言語処理面だけに通訳研究の焦点が当てられてきたことを問題視して、「社会的な実践としての通訳」「言語、文化、そしてコミュニケーションにおける社会的要素を調整する役割を果す通訳者」という概念を提唱している。このことは「訳し方」だけでなく「関わり方」という社会的機能も含めた役割を果たす通訳像を提案しているといっていいだろう。

「黒子」か「参与者」かという二極に通訳者の役割を分ける考え方においては、「黒子」であれば当然、「関わり方」は陰に隠れ、「訳し方」は直訳的であり、「参与者」であれば積極的に関わり、意訳をすると考えられている。受動的すなわち直訳的、能動的すなわち意訳的というように、「訳し方」と「関わり方」の関係が固定的なのである。しかし今回の分析では、受動的な「関わり方」をするとしても、「訳し方」には直訳的な2つのクラスターと、意訳的な2つのクラスターが存在していた。能動的な「関わり方」の場合にも意訳の種類が2つ見られる。通訳者の役割は、「訳し方」(言語的機能)と「関わり方」(社会的機能)という2つの機能を区別して研究されるべきであろう。

通訳研究の中には翻訳研究をモデルとしているものがあるが、基本的に翻訳者にとっては「関わり方」は主要なものではない。これまで、翻訳と通訳の違いについては「文字を扱うのか、話し言葉を扱うのか」「時間があるのか、ないのか」「一人で作業をするのか、人の中でするのか」「辞書を引けるのか、引けないのか」などがあげられてきた。セレスコヴィッチ (Seleskovitch, 1978, p. 2) は、通訳と翻訳の決定的違いは、「翻訳は固定され静的 vs.通訳者は対話に参加し、聞き手の反応を確認する」ことであり、「会議通訳は翻訳の 30 倍の速度で行う」と述べている。

今回の分析は、翻訳と通訳の違いに関する新たな切り口を提供するものである。セレスコヴィッチも述べているように翻訳は完結した「固定的で静的」なものを、原文作者とは離れた場所や時間で訳す。そのため、翻訳に関する研究は「訳し方」の研究である側面が強い。これに対して、「対話に参加」してコミュニケーションが行われている場に同時に存在し、完成品ではなく過程に関わる通訳者には、聞き手の反応を確認することを含めた「関わり方」という社会的機能も多く求められることになる。先述のアンジェレーリの「社会的な実践としての通訳」「社会的

要素を調整する通訳」という解釈は、翻訳者にはない役割であろう。文字を相手に訳し方を工夫する翻訳者と違い、通訳者は人間と人間の「今ここ」のかかわりにおけるコミュニケーションを仲介する、すなわち現場での対話や交渉などのコミュニケーション過程に参加し関わるという役割を担っているといえる。この意味で、通訳者は翻訳者に比べてコミュニケーションの社会的機能に参与する程度が高いといえよう。

また、翻訳者はすでにそこにあるものを訳すが、通訳者は過程に参加するために結果に影響を与える可能性があるということが言える。このように考えるとクライアントやスピーカーが通訳者に「黒子」を求めるのは、結果への影響をできるだけ排除したいからだと推察できる。加えて、通訳者に比較して翻訳者には意訳や解釈の裁量がより多く認められている現状も、この違いから説明できる。すなわち、翻訳者と比較して結果に影響を与える可能性が大きい通訳者に対しては、規制も大きくなり与えられる裁量権は小さくなる、と考えられる。

通訳者の役割を検討してくると、依頼された通訳場面や分野などによって、自分の「訳し方」や「関わり方」を柔軟にシフトさせる能力が必要であるといえる。ただし、通訳者が今回のクラスターに基づいた類型に合わせて準備をして現場に赴いたとしても、それだけでは遂行できない場合もあるだろう。たとえば、A(言葉を訳す)のモードに対応する司法通訳を例にとると、同じ捜査場面の通訳であっても、ケースごとに捜査官も違えば被疑者も違いその通訳観も異なる。事件の内容や捜査の進行具合も違ってくる。さまざまな要素が場面ごとに異なるので、必ずしも A というクラスターの類型通りのことをやっていればいいということではない。場合によってはほかのモードにシフトしたり、組み合わせたりする必要もあると考えられる。

このように通訳者は、前述の 6 つのスタイルを柔軟に取り入れて組み合わせ、その場における通訳者に対するニーズに応える必要がある。そのために通訳者が考慮すべき要素としては、第 4 節での検討から、場面、分野、通訳モードが考えられる ³⁾。これらの要素を今後、通訳者の役割に関する理論に組み込んでいく必要があるだろう。本研究がそのための基本的枠組みを提供することになれば幸いである。

•••••

【謝辞】本論文の執筆にあたってご指導をいただきました南山大学大学院・人間文化研究科の津村俊充教授、加藤隆雄教授、ならびに査読者の方々に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。加えて、インタビューや山分け法などにご協力いただき、また激励していただいた数多くの方々の存在なしには実現不可能でした。心から感謝の意を表します。

【著者紹介】

溝口良子 (MIZOGUCHI Ryoko) 南山大学大学院人間文化研究科修士課程修了 現在は研修生。フリーランス英語通訳者。大学などの非常勤英語教員 通訳教育にも従事。

連絡先:wl@world-link.jp

【註】

- 1) ここでいう半構造化インタビューとは、事前に大まかな質問事項を決めておき、被面接者の回答の流れに沿いながらさらに詳細にたずねていく面接法である。
- 2) 事前に準備した質問項目には、次のような内容が含まれる。

クライアントに対して:

「貴社では通訳者を雇用される際に、通訳者にどのような役割を期待されますか(訳出業務、その他の働きに対する期待)」「通訳者の業務に満足されるのはどういう時ですか」「また、不満が残るのはどういう時ですか」「これまで貴社が開催された会議や講演会などで通訳者を雇用された場合に、そのイベントの最終的な目標やゴールを事前に通訳者に伝えられたことはありますか」「最終目標などを伝えられた場合と伝えない場合で、通訳業務への満足度に違いがありましたか?」

通訳者に対して:

「あなたは通訳者の訳出業務や、それ以外の働きとはどのようなものだと考えていますか。また、実際にどういう役割を果たしていますか」「通訳業務が成功と思えるのはどんな場合だと思いますか」「これまでで一番うまくいった通訳業務について教えてください」「また、こうすればよかったな、と後悔が残る通訳業務についても、よければ教えてください」「黒子でいい場合と、それ以外の役割をする場合との割合はどれくらいですか」「イベントの最終目標やクライアント・スピーカーの通訳者への希望を事前に伝えられることは、どれくらいありますか」

3) これ以外にも、通訳行為には、クライアントとスピーカーの希望や目的、聴衆の数と質、時間的余裕の有無、非言語メッセージの読み取りの必要性の有無、場のプロセスを読むことの有無もパラメーターとして導入する必要性があるだろう。

【文献】

Angelelli, C. V. (2004). Revising the interpreter's role: A study of conference, court, and medical interpreters in Canada, Mexico and the United States. Amsterdam: John Benjamins.

Goffman, E. (1959). The presentation of self in everyday life. New York: Anchor Book.

Reddy, M. (1979). The conduit metaphor: A case of frame conflict in our language about language. In A. Ortony (Ed.), *Metaphor and Thought*. (pp.284-324) Cambridge: Cambridge University Press.

Seleskovitch, D. (1978). *Interpreting for international conferences* (S. M. Daily & E. N. McMillan, Trans.), Washington DC: Pen & Booth.

福井治弘・浅野輔 (1961) 『英語通訳の実際』研究社

林知己夫・飽戸弘 (1976) 『多次元尺度解析法―その有効性と問題点―』サイエンス社

稲生衣代・染谷泰正 (2005)「通訳教育の新しいパラダイム—異文化コミュニケーションの視点に立った通訳教育のための試論」『通訳研究』第5号, pp.73-109

稲生衣代 (2003)「放送通訳の変遷と通訳・翻訳手法に関する考察—CNN 二ヶ国語放送を例に —」『通訳研究』第3巻、pp.54-69

小林淳夫 (1996) 『通訳の極意―達人のテクニックとトレーニング方法―』 南雲堂フェニックス

松原敬之 (2004)「日独法廷通訳メモ」『通訳理論研究論集』pp.271-277

光藤京子 (2002)「AVT としての通訳と今後の課題」『通訳研究』第2号, pp.87-98

水野真木子 (2005)「各種通訳倫理規定の内容と基本理念―会議、コミュニティー、法廷、医療 通訳の倫理規定を比較して」『通訳研究』第5号, pp.157-172

ピンカートン曄子・篠田顕子 (2005)「実践英語スピーチ通訳―式辞挨拶からビジネス場面まで」 大修館書店

ピンカートン・曄子 (2004)「通訳者には編集が許されるか:日本とオーストラリアの通訳原理の比較」『通訳理論研究論集』pp.137-148

篠田顕子・新崎隆子 (1995) 『ボランティア通訳のすすめ』 はまの出版

瀧本眞人 (2006)「AUSIT 倫理規定と通訳者の行動—ビジネス分野におけるダイアログ通訳の 場合—」『通訳研究』第6号, pp.143-154

鳥飼久美子 (2007)『通訳者と戦後日米外交』みすず書房

鳥飼久美子 (1994)『通訳と翻訳 異文化理解とコミュニケーション 1』三修社

辻和成(2006)「日本のビジネス通訳についての一考察—大手企業のグローバル人事を背景として—」『通訳研究』第6号, pp.129-142

辻和成・辻勢都 (2004)「国際ビジネスにおけるコミュニケーション」『通訳理論研究論集』pp. 259-269

吉田理加 (2007)「法廷相互行為を通訳する—法廷通訳人の役割再考—」『通訳研究』第7号, pp. 19-38

附表 1「通訳場面における通訳者の役割」の項目リスト

| 番号 | 項目 |
|----|---------------------------------------|
| 1 | 声の大きさや張りなどに気をつけて訳す |
| 2 | なるべく標準語に近い日本語で訳す |
| 3 | 場の雰囲気に飲み込まれず堂々と訳す |
| 4 | 話者の陰で目立たないように訳す |
| 5 | 聴衆に通訳の存在を意識させないように訳す |
| 6 | 場の雰囲気を盛り上げるように訳す |
| 7 | その場に合った言葉遣いで訳す |
| 8 | 聴衆の年齢や知識レベルに合った言葉で訳す |
| 9 | 話者のレベルに合った言葉で訳す |
| 10 | 話者の話し方(丁寧な話し方、ざっくばらんな話し方など)にあわせて訳す |
| 11 | 話者と同じテンションで一体になって訳す |
| 12 | 話者の感情的な表現(怒り、ののしりなど)もそのまま訳す |
| 13 | 話者が話し下手でもそのとおりに訳す |
| 14 | 話者より長くかからないように訳す |
| 15 | 日本人の謙遜表現などを英語に訳しても意味が通じないと感じても、そのまま訳す |
| 16 | わかりにくい話は、通訳者がわかるまで待って全部訳す |
| 17 | わかりにくい話でも、わからないなりにある程度の固まりごとに訳していく |
| 18 | 冗談を訳す時は、文化の差で通じないと思ってもそのまま訳す |
| | |

| 19 | 時間がなくても、カットせずに全て訳す |
|----|-----------------------------------------------------|
| 20 | 話されたカタカナの専門用語はそのまま伝え、語と語のあいだをつなぐ部分だけを 訳す |
| 21 | カラオケの歌詞や諺など日本独特な心情を表す言葉を訳す時は、そのまま訳して 文化の差を感じてもらう |
| 22 | 一語一句を正確に訳す |
| 23 | 話者の感情表出のノンバーバルなものは含めず、言葉だけを訳す |
| 24 | 情報が不足してわかりにくくてもそのまま訳す |
| 25 | 知らない単語や表現が出たときは、すべて聞き返して正確に訳す |
| 26 | 話者の話にまちがいがあるときも、そのとおりに訳す |
| 27 | 話者の話の流れを壊さないように、タイミングよく訳す |
| 28 | 聴衆を退屈させないようにテンポよく訳す |
| 29 | 話者と聴衆が直接話したような感じになれるように訳す |
| 30 | なるべく多くの情報量を伝えるように訳す |
| 31 | 対立しているグループの間に立って通訳をする時も、言われたことをそのとおりに訳 す |
| 32 | 自分の訳のミスに気付いたら必ず早めに訂正する |
| 33 | 英語と日本語のロジックの違いは仲介せずにそのまま訳す |
| 34 | 話者の話すスピードが速いときもできるだけついていって訳す |
| 35 | 話者の話が長いときも、区切りがくるまでついていって訳す |
| 36 | 多少不自然な日本語になっても、なるべく聞こえた順番に訳していく |
| 37 | 話者が何かをほのめかしているとわかっていても、言葉に現れていることだけを伝える |
| 38 | 聞いている人が納得や理解をしているかどうかにかかわらず、そのまま訳す |
| 39 | セクハラに近い発言もそのまま訳す |
| 40 | 話の展開を予想しながら訳す |
| 41 | 事前準備で調査・収集した背景知識を駆使して、話者の言いたいことを把握して訳す |
| 42 | 話者の考え方やロジックを理解し、話者の意図を把握して訳す |
| 43 | セクハラに近い発言は、適当な表現に直して訳す |
| 44 | 聴衆や参加者の表情を見て、納得し理解しているかどうかに配慮しながら訳す |
| 45 | 英語の語順にこだわらず、日本語として自然な表現に直して訳す |
| 46 | 話者の言葉を自分の言葉にそしゃくして訳す |
| 47 | 話者が乱暴な言葉使いなどをした場合は、適切な言葉に直して訳す |
| 48 | 感情的な表現(怒り、ののしりなど)は中立的に訳す |
| 49 | 話者の話がわかりにくい場合は、通訳者が話者の意図を察してわかりやすく訳す |
| 50 | 話者の話がわかりにくい場合は、話者に言い直してもらうように頼んでから訳す |
| 51 | 話者の話がわかりにくい場合は、通訳者が話者に確認してから訳す |
| 52 | 話者より長くなっても、説明を加えてわかりやすいように訳す |
| 53 | 日本人の謙遜表現などを英語に訳しても意味が通じないと感じたら、カットして訳す |
| 54 | 日本人の謙遜表現などは英語に訳しても意味が通じないと感じたら、英語として自 然な表現に直して訳す |
| 55 | 冗談を訳すときは文化の差を考えて、なんとか笑いが起こるように工夫して訳す |
| 56 | 時間がないときは全体を要約して訳す |
| 57 | 時間がないときは重要な事柄だけを訳し、他はカットする |
| 58 | 時間がないときは、その旨を話者に告げて短く話してもらう |
| 59 | 時間がないときは、コーディネーターに合図や指示を出す |

| 60 | カラオケの歌詞や諺など日本独特な心情を表す言葉を訳す時は、文化の差を埋め |
|----|-----------------------------------------------|
| 00 | てわかりやすく訳す |
| 61 | 一語一句よりも話者の意図を把握して、それを伝えるように訳す |
| 62 | 話者の英語力が低い場合、言いたい内容を察して訳す |
| 63 | 話者の英語力が低い場合、言いたい内容を確認して訳す |
| 64 | 話者の感情表出のノンバーバルなものも含めて、伝えたい内容や意図を訳す |
| 65 | そのまま訳しても聴衆に通じないと思うときは、文化差を補足説明する |
| 66 | 情報が不足してわかりにくいと思ったら、情報を足して訳す |
| 67 | 知らない単語や表現が出たときは、その部分を飛ばして訳す |
| 68 | 知らない単語や表現が出たときは、前後の文脈から判断して整合性があるように訳 |
| | す |
| 69 | 知らない単語や表現が出たときは、重要な部分だけ聞き返す |
| 70 | 話者の話にまちがいがあるときは、話者に確認して訂正したものを訳す |
| 71 | 英語と日本語のロジックの違いを察して、聴衆の文化でのロジックに合わせてわかり |
| | やすく訳す |
| 72 | 話者の話が長いときは、割り込んで訳す |
| 73 | 話者のスピードが速いときは、その場でゆっくり話してくれるように頼む |
| 74 | 会議などでは、主催者のもち時間や流れ(スケジュール)を頭に入れて訳す |
| 75 | 全体の進行に配慮し、気づきがあれば、主催者などに伝える |
| 76 | 会議などでは、予定された議題をすべて話し切るように配慮する |
| 77 | 講演などで、重要な情報を話者が出していない場合は、主催者に伝える |
| 78 | 講演などで、重要な情報を話者が出していない場合は、話者本人に伝えて話してもらう |
| 79 | 議論が伯仲した場合、発言内容を訳すとともに、冷静な立場として助言もする |
| 80 | 発言内容を訳すととともに、司会や進行役も兼ねる |
| 81 | 対立しているグループの間に立って通訳をする時は、感情的部分は省いて必要な |
| | 情報だけを双方に伝える |
| 82 | 対立しているグループの間に立って通訳をする時は、クライアント側に立って訳す |
| 83 | 対立しているグループの間に立って通訳をする時は、言葉だけでなく発言の意図を |
| | 聞き出して、双方に伝える |
| 84 | 話者が慣れていない場合は、話すべき内容を話し忘れしてしまうことがあるので、そ |
| | のことを本人に知らせる |
| 85 | 自分の訳のミスに気付いてもそのまま訂正せずに訳を続ける |
| 86 | 訳し忘れた時は、次の言葉を訳すときに補足して訳す |
| 87 | 訳し忘れた時は、早めにその部分を訳す |
| 88 | PC用語など日本だけで通用する和製英語を使う日本人の表現は、自然な英語に |
| 90 | 直して訳す |
| 89 | 専門用語は聴衆にわかりやすい一般表現に直して訳す |
| 90 | 話者が何かをほのめかしているとわかる場合、言葉の奥にあるメッセージも伝える |
| 91 | 感情的な表現(怒り、ののしりなど)は「そのまま訳してもいいですか」と話者に確認してから訳す |
| 92 | 自分の訳のミスに気付いたら、後でタイミングをみて訂正する |
| 93 | 対立しているグループの間に立って通訳をする時は、仲介するような訳し方をする |
| 94 | 対立しているグループの間に立って通訳をする時は、通訳者が正しいと判断した側 |
| | に立って訳す |
| | \ |